第16回 物語・小説(5)

性格と人物像

◆次の文章をしっかり音読してから、後の問いに答えなさい。

晩秋のつめたい川で、だれが最後まで入っていられるかを競争し、歩けなくなるまでがんばった兵太郎君は、その後ずっと学校を休んでいる。兵太郎君が死ぬのではないかと心配する久助君は、子どもながらに生きることの「むなしさ」を感じとってしまう。

久助君は、(1)ほかの友だちとわらったり話したりするのが、きらいになった。そして、ひとりでぼんやりしていることが多かった。それから、ひどく忘れっぽくなった。なにかしかけて忘れてしまうようなことが多かった。いま手に持っていた本が、ふと気づくと、もう手になかった。どこにおいたか、いくら頭をしぼっても思いだせないというふうであった。お使いにいって、買うものを忘れてしまい、あてずっぽうに買って帰って、まるでラジオで聞く落語みたいだとわらわれたこともあった。

もとから久助君は、どうかすると(2)見なれた風景や人びとのすがたが、ひどく殺風景にあじけなく見え、そういうもののなかにあって、じぶんのたましいが、ちょうど、いばらの中につっこんだ手のように、いためられるのを感じることがあったが、このごろはいっそうそれが多く、いっそうひどくなった。こんなつまらない、いやなところに、なぜ人間は生まれて、生きなければならぬのかと思って、ぼんやり庭の外の道をながめていることがあった。また、つめたい水にわずか五分ばかりはいっていただけで、病気にかかり死なねばならぬ（久助君には、兵太郎君が死ぬとしか思えなかった）人間というものが、いっそうみじめな、つまらないものに思えるのであった。

三学期のおわりごろ、ついに兵太郎君が死んだということを、久助君は耳にした。べんとうのあと、久助君は教壇のわきで日なたぼっこをしていた。すると、むこうのすみで話しあっていた一団のなかから、

「兵タンが死んだげなぞ。」

と、ひとりがいった。

「ほうけ。」

と、ほかのものがいった。べつだん、おどろくふうも見えなかった。久助君もおどろかなかった。久助君の心は、おどろくには、くたびれすぎていたのだ。

「うらのわら小屋で死んだまねをしとったら、ほんとに死んじゃったげな。」

と、はじめのひとりがいうと、ほかのものたちは明るくわらって、兵太郎君の死んだまねや腹痛のまねのうまかったことを、ひとしきり話しあった。

久助君は、もう聞いていなかった。ああ、とうとうそうなってしまったのかと思った。そっと片手を、ゆかの上の日なたにはわせてみると、(3)じぶんの手はかさかさして、くたびれていて、悲しげに、みにくく見えた。

日ぐれだった。

久助君のからだの中に、ばくぜんとした悲しみがただよっていた。昼のなごりの光と、夜の先ぶれのやみとが、地上でうまくとけあわないような、みょうにちぐはぐな感じのひとときであった。

久助君のたましいは、長い悲しみの連鎖のつづきを、くたびれはて

053-055_enshu-Ja-5u_KOB_F1.indd 53　12.11.12 6:40:36 PM

ながら旅人のようにたどっていた。
六月の日ぐれの、びみょうな、そして豊富な物音が戸外にみちていた。それでいてしずかだった。
久助君は目をひらいて、柱にもたれていた。なにかよいことがあるような気がした。いやいや、まだ悲しみはつづくのだという気もした。
すると遠いざわめきのなかに、ひと声、子山羊の鳴き声がまじったのを聞きとめた。久助君はしまったと思った。生まれてからまだ二十日ばかりの子山羊を、昼間川上へつれていって、昆虫を追っかけているうち、つい忘れてきてしまったのだ。しまった。それと同時に、子山羊はひとりで帰ってきたのだと、確信をもって思った。
久助君は、山羊小屋の横へかけだしていった。川上のほうを見た。
子山羊は、むこうからやってくる。
久助君には、ほかのものはなにも目にはいらなかった。子山羊の白いかれんなすがただけが、――子山羊とじぶんの地点をつなぐ距離だけが見えた。
子山羊は、立ちどまっては川っぷちの草をすこし食み、またすこし走っては立ちどまり、無心に遊びながらやってくる。
久助君は、むかえにいこうとは思わなかった。もうたしかにここまでくるのだ。
子山羊は、電車道もこえてきたのだ。電車にもひかれずに。あの土手のこわれたところも、うまくわたったのだ。よく川に落ちもせずに。
久助君は胸があつくなり、なみだが目にあふれ、ぽとぽとと落ちた。
子山羊はひとりで帰ってきたのだ。
久助君の胸に、ことしになってからはじめての、(4)春がやってきたような気がした。

久助君はもう、兵太郎君が死んではいない、きっと帰ってくる、という確信をもっていたので、あまりおどろかなかった。
教室にはいると、そこに、――いつも兵太郎君のいたところに、洋服にきがえた兵太郎君が、白くなった顔でにこにこしながらこしかけていた。
久助君は、じぶんの席へついてランドセルをおろすと、目を大きくひらいたまま、兵太郎君を見てつっ立っていた。そうするとしぜんに顔がくずれて、兵太郎君といっしょにわらいだした。
兵太郎君は、海峡のむこうの親せきの家にもらわれていったのだが、どうしてもそこがいやで、帰ってきたのだそうである。それだけ久助君はひとから聞いた。川のことがもとで、病気をしたのかしなかったのかは、わからなかった。だが、もうそんなことはどうでもよかった。兵太郎君は帰ってきたのだ。
休けい時間に、兵太郎君が運動場へはだしでとびだしていくのを窓から見たとき、久助君は、(5)しみじみこの世はなつかしいと思った。そして、めったなことでは死なない人間の生命というものが、ほんとうにとうとく、美しく思われた。そこへもう一つ思い出すことがあった。
それは、去年の夏、兵太郎君と川あそびに行って、川からあがったばかりの、ぴかぴか光るおたがいのはだかんぼうを、おいしげった夏草の上でぶつけあい、くるいあって、たがいにさいげんもなくわらいころげたことだった。

（新美南吉「川」より）

問一　この文章を大きく四つの部分に分けるとすると、第二、第三、第四の部分はどこからですか。それぞれはじめの五字をぬき出し

053-055_enshu-Ja-5u_KOB_F1.indd 54 12.11.12 6:40:36 PM

て答えなさい。

問二　――線(1)「ほかの友だちと……きらいになった」、――線(2)「見なれた風景や……あじけなく見え」とありますが、久助君がそんなふうに思ったのはなぜですか。文章中の言葉を使って六十字以内で答えなさい。

問三　――線(3)「じぶんの手は……見えた」とありますが、

1　この場合の「手」は何の象徴と言えますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　生命　　イ　病気
ウ　この世　　エ　友情

2　このときの「手」と対照的なものを文章中から二十字以内でぬき出して答えなさい。

問四　――線(4)「春がやってきたような気がした」とありますが、「久助君」がそのような気分になったのはなぜですか。文章中の言葉を使って説明しなさい。

問五　――線(5)「しみじみこの世はなつかしいと思った」とありますが、

1　この場合の「なつかしい」の意味として、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　親しみやすくて、気楽になれる。
イ　かわいらしくて、とてもあこがれる。
ウ　好ましくて、強く心ひかれる。
エ　こいしくて、いつも思い出される。

2　「久助君」は、それまでこの世をどのようなところだと思っていましたか。文章中から十二字でぬき出して答えなさい。

問六　この文章から読み取れる「久助君」の性格として適切なものを次から二つ選んで、記号で答えなさい。

ア　感受性が強い　　イ　楽天的でおおらか
ウ　積極的で明るい　　エ　自分勝手でわがまま
オ　正義感が強い　　カ　心配性で思いつめやすい

問七　この文章を通して表現されていることとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　もともと友だちとつきあうのが苦手だった久助君が、あるできごとをきっかけに、かえって友情をふかめていく姿。
イ　生きることにむなしさを感じていた久助君が、あるできごとをきっかけに、生きることの喜びに気づく姿。
ウ　何ごとにもいいかげんだった久助君が、あるできごとをきっかけに、ものごとを真剣に考えるようになる姿。
エ　生きる意味がわからなくなっていた久助君が、あるできごとをきっかけに、世の中のしくみを理解する姿。

053-055_enshu-Ja-5u_KOB_F1.indd　55　　12.11.12　6:40:36 PM